

領域性

—社会地理学の概念あるいはパラダイム?—

クロード・ラフェスタン
(遠城明雄 訳)

Claude RAFFESTIN

Territorialité: Concept ou Paradigme de la géographie sociale?

Géographica Helvetica 1986, 91-96.

いくつかの疑問と不確かさ

タイトルのそれぞれの言葉についての疑問点は、余計なことではないだろうが、私はさしあたって、《社会地理学(géographie sociale)》(Sozial Geographieあるいは social geography)という、その内容が結局のところ人文地理学との関連で不明確である表現について検討するにとどめたい。不確かさは、《社会地理学》と《人文地理学》が、英語においては実際に《重なった》側面をかなりもつ類義語であることにある。こうした側面は、おそらくフランス語圏とドイツ語圏の地理学において、若干少ないかもしれないが、その相違は理論的性質よりも主題上の性質にある。このことは、地理学における一般理論の不在を露呈させるにすぎない。総体的な理論のこの不在は現在、国際的な文献目録によって少なくとも発展、保証された地理学的な実践(pratique)と、隣接諸科学とくに統計学と数学からの借用物によって絶えず豊かになり、さらに重厚になった方法論的な認識との間をつなぐ障害になる。計量《革命》が問題設定の刷新も理論の革新も引き起こさなかったことが繰り返されねばならないのか。いくつかの方法だけが進歩し、それに従う《形の上での化粧(cométique formelle)》が理論的な観点の出現を信じさせてきた。換言すれば、地理学のパラダイムに変化があったのではなく、ただ単に質的な手続きから形式化された翻訳があったにすぎない。このことは確かに無視されるべきことではないが、地理的諸現象の《観察のプログラム》あるいは《読解の鍵》という意味で理論を語ることは行きすぎである。

したがって人文地理学は、農地、都市、人口移動、諸活動の立地などの構造化に関する個別の諸理論を欠いているのではなく、こうした部分的な諸理論の間の関連づけを可能にする総体的な理論を欠いているのであり、言葉の厳密な意味でそれが無いことは明らかである。私はそれで、領域化、脱領域化、再領域化の過程がなぜ、またどのようにして生じるのかを説明するであろう領域的な生態生成(l'écogenèse)の一般理論が欠如しているといいたい。なぜしてどのようにしてということは、不可避免的に社会の生産理論を反映する歴史性によって条件づけられている。そしてこの理論は、多様な形式の下で存在するが、領域がその理論の一部を形づくるとしても、領域に大きな部分を割いてこなかった。

確かに全ての領域(的)形態学に関するその沈黙によって、マルクスは暗黙のうちに地理学理論の考えそれ自体に対して批判を投げかけていた。なぜなら都市—農村関係において、都市と農村は地理学的なカテゴリーではなく、社会学的なカテゴリーであるからである(Raffestin 1985)。こうした態度によってマルクスが、非常に多くの地理学者がそこに陥り、そうでない地理学者が皆無であった空間主義の罠に、他の社会学者同様にマルクス主義社会学者が陥ることを免れさせたことは真実である(Raffestin 1985)。少なくとも領域的な生態生成の地理学理論は、たとえその物質的形態が秩序づけの過程の諸表出にすぎないひとつあるいはいくつかの形態学に着したとしても、空間主義とは何ら関係がない：フォン・チューネンの理論は同心円に還元されないし、クリスタラーの理論も六角形に還元され

ない。前者も後者も、ひとつあるいはいくつかの組織化の原理の結果にすぎない。

空間的な諸配置は、それについてどんなことが考えられようとも、人文地理学あるいは社会地理学の本質ではない。つまりそれは十分条件ではなく、必要条件にすぎない。なぜなら地理学は《領域的生産》を説明する唯一のものではないからである。画家、振付師、劇場や映画の演出家、テーブルを飾る一家の主婦などはすべて、現在は存在していないが作り出されるべきである。様態論(*diathetique*)と名付けられうるひとつの学問に属する空間的な配置と向き合っている(Raffestin 1985)。領域的形態学は、人間が地理的空間というこの現実について有する慣習的行動(*pratique*)と認識から生じるのである。

領域的な生態生成の理論の根本は、結局は人間の行為に与えられた原材料にすぎず、またその属性が多少とも同質的であり、多少とも規則的に配分され、また多少ともあるものを別なものから隔てる、空間にあるのではない。それは人間諸集団が空間にある程度の居住可能性を備えた領域に変換するように、この空間を占拠し、開拓し、変形するために用いる慣習的行動と認識にある。人文地理学、したがって社会地理学の一般理論の全ての根本は、集団と集団を構成する諸主体の慣習的行動と認識においてのみ探究されうる。

この慣習的行動と認識は、外部性と他者性への諸関係によって表され、利用される諸媒介によって調整される。この諸関係の総体が領域性と呼ばれ得るものを、大まかにまだ曖昧な仕方ではあるが構成する。しかしながら私はあとでこの概念に戻るつもりである。この点について、私は自分が人文地理学と社会地理学の間の混乱を抱え続けていることに気付いている。社会的特徴に関する統計データの《位置付け》のなかで長い間誤解され、いまだに誤解されている社会地理学の地位に関して、はっきりとした不確かさが明らかにある。社会-職業の諸集団、給与所得あるいは政治的-宗教的帰属を一枚の地図に写すことは、たとえこれらの主題図にある解釈が含まれているとしても、社会地理学に関わるものであることを意味しない。この点について最近のある研究は、こうした傾向を示唆している(Fremont et al 1984)。つまり諸集団を特徴づける諸属性が説明されるだけであり、これによってこの諸集団がその所持者である慣習的行動は明らかにされない。古典的な社会地理学者は大変頻繁に諸属性と場所を一

致させ、出来る限り相関関係を探究し…そして常に相関関係が発見される。しかしながらこの諸属性は、ひとつの生産の帰結であり、慣習的行動によって領域のなかに刻印された諸現象から切り離された統計学的な形式に位置付けることから生じる。

社会地理学におけるいかなる真の省察も、慣習的行動が領域に刻印する指標、痕跡あるいは記号から出発しなければならない。慣習的行動的であると同時に形態学的である社会-地理学的なこれらの《沈殿作用(*sédimentations*)》に関心を集中することが適切である。この点についてヴォルフガング・ハルトケ(Hartke)の社会的休閒やルネ・ロッシュホル(Rochefort)の労働といった現象は、きわめて意義深いものであるが、それは展開されてこなかった。

顕示的な諸現象

社会的休閒(*Sozialbrache*)は、普及することで陳腐化につながってしまったけれども、否定できない成功を収めてきた観念である。その大きな豊かさから、社会的休閒は、幾つかの問題を提示する。つまり領域的《離脱(*déprise*)》の現象およびその反対に領有(*emprise*)の現象について問うことを可能にする。社会的休閒は観察可能であり、また見かけ上は静態的であるように思われるが、実際には社会諸集団のなかで生起する諸過程に準拠している。目標に向かう戦略によって枠づけられた慣習的行動それ自体によって規定される諸過程。領域的離脱は、現在では消滅してしまった慣習的活動に準拠することで解釈される。そこでは社会的休閒は証拠にすぎず、ある種の空間的な遺物にすぎないが、同時に予見的な慣習的活動、つまり予測に準拠することによっても解釈されうる。社会的休閒は過去を明らかにすると同時に未来の輪郭を描く。すなわち諸関係の古いシステムの消滅と新しい潜在的なシステムの出現-過去の領域化、現在の脱領域化、未来の再領域化の過程を明らかにする場所であり、社会的休閒は社会諸集団のなかで情報が果たす根本的な役割を明らかにするが、そこでは内生的あるいは外生的な情報が問題になる。領域的離脱と領有の機制は、明らかに具体的な地理空間に関係するが、たとえ具体的空間の介在が必要であるとしても、例えば、労働という抽象的空間に関係する諸過程を想像することが可能である。ロッ

シュホールの《労働》は、シシリー島のような古い社会構造によって完全に条件づけられた離脱のもうひとつの事例である。

離脱と領有というこの現象は、複雑な社会諸現象の観察可能な一部にすぎない。それは歴史性によって規定されている《氷山》の可視的あるいは視覚化可能ないくつかの地理的《点》である。地理学者が領域的構造化を説明しなければならないとしたら、地理学者の役割が、諸集団の行為との関連でのみ存在しうる諸形態を取上げることによって還元されると考えるのは全く誤りである。そうではなくて地理学者は、人間が空間と諸領域について持っている諸慣習行動と諸認識に関する認識を明示するように務めねばならない。

したがって、領域の生態生成理論は、諸集団とそこに属する諸主体が、システムの諸資源と両立可能な限り最大の自律性を獲得するという視座において、諸媒介によって外部性および他者性と維持する諸関係の分析にのみ基礎づけられる。つまり私は領域性の可能なひとつの定義を与えたことになる。社会的休閒の場合に、優先的に関連するのが外部性であるのに対して、非-労働の場合には、他者性である。

実際に我々は、社会地理学において領域の生態生成理論を演繹的にも帰納的にも持っていない。換言すれば、我々は、理論的性格をもたない歴史的あるいは回顧的な探究に身を委ねることはさておき、ある領域がなぜどのようにして構造づけられ、脱構造化され、また再構造化されるのかを語るができない。

私は以前に、理論は観察のプログラムであるといったが、それは省察のプログラムにもなりうる。関係という考えによって、社会地理学における理論の緊急な必要性を理解させるために、私が自ら進もうと思うのは、この第二の方向性においてである。

創成のユートピア

省察のプログラムとは、単純化された手続きによって複雑なメカニズムを理解するための手段を自らに与える方法に他ならない。つまり理論は、ある現実を説明するのではなく、現実をのちに理論化するためにこの現実に関与する諸要素の発見を可能するといえる。私が提起するのは、置き換えの現象である。つまりユートピア的構築物を現実的構築物に置き換えること。

いくつかの創成神話、例えばローマ神話を参照するとしたら、領域の生態生成理論の諸要素が叙事詩的な言葉のなかに発見される。ロムルスとは、ローマの時間と空間がそれによって存在するようになった生きた主体である。なぜならば《生きた主体なしには、時間と空間は存在しない》(Uexkull 1956)からである。ロムルスは自らの境界を引くと同時に、時間に《新しい》時間、つまり禁止の新たな働きを設定する。つまり内、外、前、後。《自己、ここと今に(Ego, Hic et Nunc)》というロムルスの言葉があるが、《空間の現象学は、時間の現象学と同様に、ここといまという私の身体の間から始まるので、この現象学はこの場を中心として獲得するであろう》(Mole et Rohmer 1972)。ロムルスは空間と時間に線を引き、規範と禁止を制定し、《究極の規則(Regere fines)》を纂奪する。そしてその規則によって表現し規則づけ、区分し関係づけるようになる。

神話を止めにして、その純粋に発見的な性質の一種の地理学的-数学的な教訓譚になるようなひとつのユートピアを想像してみよう。この話のなかに、神話においてと同じ構成要素が別な仕方では整理されていることが再発見されるだろう。

まず最初に慣習行動と認識を所持しているある《行為者(Acteur)》、あるいは集団が必要となる。この集団が、その宗教的な理由によって正三角形に特権を与えること、またその集団の信念と慣習行動の間には完全な一致があるので、その領域的生産が等辺の原理によって完全に規定されること、があとで理解されるであろうことを、私はいくつかの理由から認める。ユートピアは完全である。なぜなら《等辺のイデオロギー》が完全に現実化されるからである。一方で歴史的な社会における規則はそのようなイデオロギーの不完全な現実化である。

その上で私は、集団が完全に均一、同質、等方な平面的なかに住まわせられること、そしてその技術的なシステムを考慮すると最初はほかの場所よりもある場所を選択する必要のないこと、を仮定する。この全く古典的な仮定は非現実的にみえるが、ものの不規則性が現実をより一層説明すると考えることは誤りである。空間の《ざらざらとした表面》は、ひとつの原理をその極限にまで推し進めることを妨げるが、その原理を明示することを妨げない。

時間 T_0 において集団はその各構成員が自らの要求

を満足するために面積 S の正三角形を持たねばならない人口 P を含んでいる。居住の瞬間から、集団は面積が $P \cdot S$ に等しくなる基本の正三角形を平面上に描くようになる。人口が安定しているならば、三角形は足りるが、人口が増加するならば、各構成員が相互の隣接関係を維持しながら基本三角形を拡大する手段を発見しなければならない。第一の可能性は最初の三角形の各側面に側面の縮尺が最初の三角形の三分の一となるような正三角形を描くことである。三つの側面が占められるので、ダヴィデの星座が現われることになるだろう。人口が増加し続けるならば、いまある側面上に三分の二つ同様の方法がおこなわれていくだろう。フォン・コッホのよく知られた曲線や《雪の結晶》(Mandelbrot 1984)の夢のような島へと近付いていくだろう。おそらく空間の構造化のこの過程にはひとつの限界、すなわち最小面積 S がある。用いられた方法では最小面積 S に等しい正三角形をもはや切り取ることができない場合に、集団は危機に陥るだろう。なぜならその等辺の原理を維持しつつ成長することができないだろうから。そこで外部性、すなわち空間との関

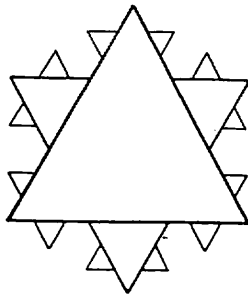


図 1

係を十分に説明する理論、つまり言明された仮説と…この種の社会がその規範と原則を尊重させるために前提とする全体主義についてよく説明する領域の生態生成理論を持つことになる。このような理論の萌芽は、たいへん抽象的であるが、外部性への諸関係に関して考察することを可能にする。まず最初に空間を領域に変換するための空間への諸関係は偶然ではなく、集団によって生み出されあるいは体得されているいくつかの原理に属しているという事実が強調されねばならない。以上のことから集団は、その記号圏(sémiosphère)(Lotman 1985)を特徴づける自由に使うことのできる情報から領域を生産するということになる。この記号

圏から生じる配列は、この場合に大変厳密にみえるが、それは視覚上の幻想にすぎない。なぜなら農村と都市の諸形態は、それ自体あまり明示的ではないか、さらには全く暗黙的にはあるが、それでも集団の外部性への関係を喚起する諸原則に従っているからである。次に始原の空間への関連によって、集団の欲求と期待に見合った三角形の領域のシステムが形成されると思われる。なぜならこの集団は物理的あるいは形而上的な理由で、正三角形上にしか展開しないからである。一般的な網目(maillage)は六角形へむかう傾向があり、それは境界を管理する問題を生じさせる。なぜなら境界は拡張していくにつれて増大するからである。最後に私が上で示したように、その限界は最小面積 S であるので、使用されていた原理が発展の妨害になることが注意されねばならない。

私は、部分的には他の本質的な要因とは別に、領域の構造化によって同様に条件づけられている他者性への関係の問題にまだ触れてこなかった。つまり中心性、周辺性、境界、距離。ここでこれらの要因は形式的には上述された原則に従う。抽象的であるにもかかわらず、人口移動が可能でないなら、この理論は、自らが導き出す障害によって明らかに矛盾を内包している。なぜならこの領域は空間という所与の監獄のなかにある監獄にほかならないからである。確かに周辺に位置する諸行為者は、正三角形の原理を捨て、領域的領有についての別の形式に訴えることで革新を求めることができる。別のモデルは明らかに可能であるが、別の配置を提供させるにすぎず、領有や外部性への関係という観念になにも付け加えないであろう。

領域性:概念あるいはパラダイム?

領域性は、動物行動学から借用された当初は、具体的な領域に関連づけられて用いられた単純な概念(単純な、という形容詞は決して軽べつではない!)であった。しかしながら今日、こうした段階はかなり以前から乗り越えられている(Raffestin 1981, 1982(I) et 1982(II) Raffestin, Bresso 1982)。このことについては他の所で示したように、諸関係のシステムとしての領域性は、社会地理学を定礎しなおす視座を開いている(Racine, Raffestin 1983)。行為者たちの慣習行動は、諸コードによって媒介されており、媒介されない関係は

存在しない。《空間の慣習行動において空間の整備(amenageur)に関わる主体は、経済的審級によって媒介されている。そしてこの審級において中心的概念は、《生産様式》の概念、あるいはより上位の水準で、既存の社会の生産様式の全体を包摂する《経済構成体》の概念である》(Racine, Raffestin 1983)。この空間を使用する(usager)主体の場合に、諸イデオロギー装置(教会、学校、メディアなど)の役割がより重要になるにちがいない。こうした視座において、社会地理学の場合(champ)、つまり外部性と他者性への連関、を決定するのが、媒介する諸関係のシステム、すなわち領域性である。

領域性とは、単なる概念ではなく、人間集団とその環境の間の複雑な関係を表わすひとつのパラダイムであり、《ここで環境は空間的な諸属性の集合によってのみならず、時間的なそれによっても構成される空間的-時間的な枠組(l'enveloppe)であり、諸行動が空間と時間という脈絡(context)において展開するように、諸行動を内的に結びつけることを可能にする》(Racine, Raffestin 1983)。

具体的かつ/あるいは抽象的な諸領域の構造化の諸現象を確定することから出発して、この諸関係を媒介する諸原理を引き出し、そこからその目録を作製し、

理論を素描することが可能である。領域性のパラダイムは、地理学の通常の順序を逆転させる。なぜなら出発点が空間ではなく、領域に痕跡と指標を残してきた行為者の道具とコードにあるからである。領域の生態生成理論へと到達するためには、この諸コードのなかに理論的な挺の支点を探し出さねばならない。こうした理由から、確かに私はその起源を確定しようとせずまたそれも当然であるが、そこにひとつの《コード》が存在していたことを示そうとして、正三角形のユートピアと《戯れた》のである。

《読解の鍵》は、空間という物質的な現実にあるのではなく、人間集団がこの物質的現実を変換するために用いる記号圏にある。行動するために、人間はある境界によって限定された、広義の記号空間に準拠する。この境界は、そのままに残されるものと変換されるもの、つまり外部性のなかで翻訳されるものあるいはされないものを決定する抽象的かつ具体的な二重の機能を持っている。文化空間がある領域的特徴を獲得する場合に、境界は単語の基本的な意味で、ある空間的な意味を獲得する(Lotman 1985)。記号圏の境界のこのような機能は、文化的な混在が存在している諸地区：都市、商業道路、別の混合的な構造、によって示される(Lotman 1985)。

そのなかで同時に多くのコードが作用している脆弱な次元をもった諸領域、すなわちいくつかの集団が異なった記号圏を要請している諸領域は、非常に興味深い。なぜならそれは比較可能性のあらゆる条件を提供してくれる領域的な生態生成の自然の実験室であるからである。いくつかの脆弱な次元あるいは大縮尺の諸領域について私が語る時、例えば、私は諸集団がその存在とその行為によって形態学的な多様性を与える都市について言おうとしている。しかしながらこの多様性は常に、領域的に変化しないいくつかの要素によって支えられている。つまり異なった領域性である諸関係の諸システムに不可欠である面域(les mailles)、結節点(les noeuds)、ネットワーク(les reseaux)が必ずに見出されるだろう(Raffestin)(1985)。

言語(ラング)について語ることを、領域についても語ることができるだろう。《言語の世界において、たとえ雑多であったとしても、それと認められる隔たりの調整が確かに存在している。あらゆる言語にとって、ひとつの関係が、いくつかの機能とそれを持ったいくつかの構造を統合する。これらの構造が、極端な多様

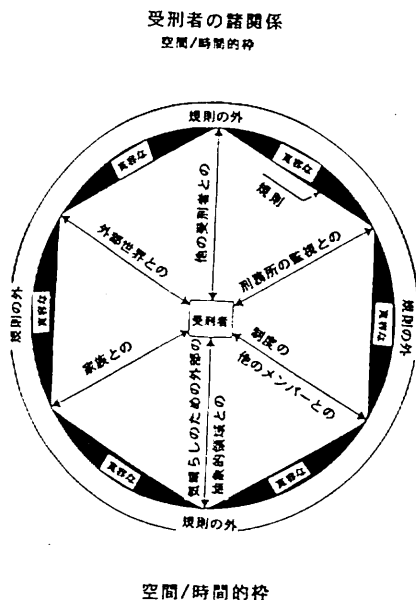


図 2

性の外観の背後に、無限定ではない隔たりのひとつの場(champ)を見渡している》(Hagege 1985)。アナロジーは偶然ではなく、言語学が《記号の領域》(Hagege 1985)について語り得るかぎり、たとえわずかであっても相関係がある。

上述のように、領域性の特徴を最もよく知ることができるのは、間違いなく非常に特殊でかつ厳密に限定された状況においてである。私はとくに監獄が示す極限の状況について考えている。とりわけ厳格に境界づけられた空間的-時間的枠組によって特徴づけられる非常に厳密にコード化された領域性が問題となる。様々な諸関係が以下の図式によって要約される：(Valsangiacomo 1985)。

刑務所のイデオロギーは、受刑者を現実の市民社会に復帰させるために、対称的な諸関係を配置することによって定義されるだろう。ところがイデオロギーの特徴のひとつは、不完全に現実されることにある。しかしながら監獄の場合に、パラドクスがその最高に達する。なぜならばすべての関係が非対称的であり、イデオロギーとユートピアの間に同一性が存在しないかどうかが自問されることになるからである。つまり監獄の外の領域性は、非対称的そして対称的な関係によって構成されているが、監獄においては非対称的な行為が重層的に決定され、作り出された権力関係は対称性の可能性さえない。言い換えると、仮定された対称的な領域性は最も純粋な想像力に属している。対称性という公理は、関係的な非対称性に帰着する！。したがってスイス刑法の有名な 37 条はユートピアにほかならない：《禁固労働と禁固は拘留者に教育的行為を与え、自由な生活への復帰を準備するように行われるだろう》(Valsangiacomo 1985)。80%以上の再犯率がこのイデオロギーのユートピア的特徴を大変雄弁に示している。

以上のように、絶対的な方法で孤立され境界づけられた《領域》に関わる場合にはなおさら、領域性のパラダイムによってこうした疑問を取り上げることがたいへん実り豊かである。それによって私は外部性との界面が不在であるのではなく、厳密に制御されかつ制御可能であるといいたい。私としては、領域性のパラダイムを拷問の問題に適用することを試み、社会問題を地理学的に取り扱う手段のひとつが、関係の諸シス

テムを説明することにあると考えていた。《したがって拷問の可能性の諸条件は、権力に交通を制限させ、居住地を監視させ、支配の場所を増やさせるような非対称的な諸関係が社会に蔓延した場合に、直ちに存在する》(Raffestin 1985)。

領域性のパラダイムは、全く地理学的な視座において、舞台の場面つまり想像的な領域の構成にも同じように適用できる(Praplan 1985)。こうした適用は、以前に問題であった創成のユートピアと共通して、領域的領有の理論したがって諸関係の多元的なシステムによる生態生成の理論の可能性を予測させる構造的な関連を持っている。いわゆる社会的な諸現象の場所の確定を検討していた社会地理学の古典的モデルは、領域の構造化と脱構造化を生み出す諸コードによって媒介された諸関係を中心に据える社会地理学が可能になることを前もって示しているにすぎないように私には思われる。

空間は人間の行為に不可欠なひとつの条件であるが、地理的な必然性は、情報、つまり行為する人々を意のままにする全てのコードによって明らかにされる。人間が使うことのできる情報によってしか地理的必然性は存在しない。したがって社会地理学は空間それ自体よりも伝播された情報によって条件づけられるように思われる。

文 献

- Fremont, A., Chevalier, J., Herin, R., Renard, J. (1984): *Géographie sociale*, Masson, Paris.
- Hagege, C. (1985): *Homme de paroles*, Fayard, Paris.
- Lotman, J. (1985): *La semiosfera*, Massilio Editori, Venezia.
- Mandelbrot, B. (1984): *Les objets fractals*, Flammarion, Paris. マンデルブロー(訳)『フラクタル』
- Moles, A., Rohmer, E., (1979): *Psychologie de l'espace*, Castermann, Toumal. モル・ロメル(渡辺淳訳)『空間の心理学』法政大学出版局。
- Praplan, B. (1985): *Pour une approche géographique du Théâtre, Mémoire de licence*, Département de Géographie, Genève
- Racine, J. B., Raffestin, C., (1983): *L'espace et la société dans la géographie sociale francophone. Pour une approche critique du quotidien*. In Paelinck et Sallez. *Espace et localisation*, Economica, Paris, p.304-330.
- Raffestin, C. (1985): *Marxisme et Géographie politique*. In

- Cahiers de Géographie du Québec*, Vol 29, No 77, p.271-281.
- Ibid. (1981): Les notions de limite et de frontière et la territorialité. In *Regio Basiliensis*, p.119-127.
- Ibid. (1982) I: Travail et Territorialité. In ISE, *Les rencontres de la Barbariga, Demain le Travail*, Economica, Paris, p.147-154.
- Ibid. (1982) II: Remarques sur les notions d'espace, de Territoire et de Territorialité. In *Espace et Sociétés*. Paris, no 41, p.167-171.
- Raffestin, C., Bresso, M. (1982) III: Tradition, Modernité, Territorialité. In *Cahiers de Géographie du Québec*. Vol 26, No 68, p.186-198.
- Uexkull, J. (1956): *Monde humain et mondes animaux*. Médiations, Paris. ユクスキュール(日高敏高訳)『動物から見た世界』思索社。
- Valsangiaomo, A. (1985): *L'espace carcéral: Le prisonnier, ses besoins, ses réponses*, Mémoire de licence, Département de Géographie, Genève.